

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520503

研究課題名（和文） 談話における分裂文の総合的研究－関連性理論、機能文法、認知言語学
による考察研究課題名（英文） A Study of Cleft Sentences in Discourse: Relevance-theoretic,
Functional and Cognitive Approach

研究代表者

加藤 雅啓 (KATO MASAHIRO)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00136623

研究成果の概要（和文）：本研究では談話における分裂文に見られる認知的・語用論的特性を関連性理論、及び認知言語学の観点から明らかにし、英語分裂文の談話における機能と解釈に関わる推論過程の解明を試みた。その結果、次の成果を得ることができた。(i) 総記的含意は言語規約的含意であるという立場は支持することができない。(ii) 日本語の「の(だ)」構文と英語の *It is that* 節構文が持つ談話機能の本質的な特性とその存在意義を語用論の枠組みから明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has investigated discourse functions of English cleft sentences and inference processes of their interpretations in discourse. The main outcomes obtained are (i) that the exhaustiveness implicatures appears to be conversational implicatures rather than conventional ones; (ii) that reviewing Otake (2009), and his claim that information in the speaker's store of knowledge plays a crucial role in the interpretation of the *It is that*-construction, and that his claim that the *no da*-construction and its English counterparts can be analyzed in terms of the dichotomy of *perception* and *cognition* can be tenable.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：分裂文、擬似分裂文、総記的含意、*It is that* 節構文、「の(だ)」構文、会話の含意、

言語規約的含意、関連性理論

1. 研究開始当初の背景

これまで文法の問題として扱われてきた項目の中には、発話場面や文脈などの語用論的要因、及びこれに基づく推論等の要因を考慮しない限り一般的な説明ができない現象が含まれている。とくに it 分裂文や疑似分裂文などの有標構文は、話し手・聞き手の背景知識に基づく「会話の含意」や推論過程が複雑に関与するため、その機能と解釈に関して語用論や機能文法、あるいは認知言語学の枠組みにおいても本格的な研究がなされておらず、依然として一致した見解が得られないのが研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、分裂文に関して、生成文法における先行研究で明らかにされた統語的制約をふまえ、機能文法、関連性理論、及び認知言語学の成果を取り入れた認知語用論の観点から、新たに談話における分裂文を分析、考察する。

(2) it 分裂文、疑似分裂文、It is that 節構文、及び日本語のハ分裂文、ガ分裂文、「の(だ)」構文を取り上げ、それぞれの構文の談話における認知的、語用論的機能と特性、談話における推論メカニズム等について、統語的制約と語用論的要因の関わり方、等々について個別に明らかにする。

(3) 個々の成果を有機的に結びつけることにより、従来の枠組みでは得られなかった新しい知見を得て、これらの分裂文に共通する談話機能の特性とその存在意義を明らかにし、談話における分裂文の認知プロセスと推論メカニズムの全容を総合的にとらえ、文法と談話の接点の姿を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、文献による理論研究、言語資料の収集

と分析、及び談話における分裂文のデータベース作成、の三つの方法によって進められる。

(1) 分裂文に関して、生成文法、関連性理論、認知言語学、及び機能文法のそれぞれの枠組みにおける先行研究を総括する。そのためにこれらの分野における従来の研究文献を包括的に調査する。

(2) 言語資料の収集は①調査票に基づくアンケート調査、②英字新聞、英文雑誌、英米文学作品、③電子コーパス、及びインターネット上の言語資料集から収集する。

(3) 収集した分裂文の用例はデータベースソフトを用いて分類・整理し、キーワード検索処理をした上でデータベースを作成する。

4. 研究成果

(1) 分裂文という有標構文に見られる文法的な特徴について考察し、恣意的であると思われている統語構造も、談話での使用という機能的な要因を受けて再構築される可能性があることを明らかにし、文法と談話は相互に依存関係にあることを示すという当初の目的を達成することができた。

(2) 総記的含意は言語規約的含意ではなく、会話の含意であることを明らかにした。

(3) 日本語の「の(だ)」構文と英語の It is that 節構文が持つ談話機能の本質的な特性とその存在意義を語用論の枠組みから明らかにした。

(4) 従来、文法と談話という 2 つの領域は、互いに独立した領域と考えられてきたが、人間の言語運用の場面では、文法による規制と談話からの要請との軋轢が文法体系の再構築を迫る圧力となる事例も少なくはない。本研究課題の今後の推進法策としては、文法による統語的規制に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請がどの

ように関わっているか、いわば文法と談話の接点の姿をさらに詳細に明らかにすることにより、今後の自然言語の統語論研究と言語運用研究に対して新たな研究領域の可能性を提示できると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① Masahiro Kato, “ [REVIEW] *The Japanese No da-Construction and the Corresponding English Constructions* By Yoshio Otake, Kurosio, Tokyo, 2009, iv+345pp
English Linguistics, 査読有、Vol. 28-2, 2012、pp. 334-343.

② 加藤雅啓, It is that 節構文と「の(だ)」構文、
上越教育大学研究紀要, 査読無、Vol. 31,
2012、pp. 189-198.

<http://repository.lib.juen.ac.jp/dspace/handle/10513/1448>

③ Nobuko Ohta and Masahiro Kato, “The Effect of Instruction on Discourse Markers from the Perspectives of Functional grammar and Cognitive linguistics: Focusing on Causal Discourse Markers.” *International Journal of Pragmatics*, 査読有、Vol.20、2011、pp. 1-25.

④ 加藤雅啓、分裂文の総記的含意、上越教育大学研究紀要, 査読無、Vol. 29, 2010、pp. 199-205.

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008699574>

[学会発表] (計 1 件)

① 加藤雅啓、談話における擬似分裂文の意味と機能、日本プラグマティクス学会、2010. 12. 18、専修大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 雅啓 (KATO MASAHIRO)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・
教授

研究者番号 : 00136623